

蕪村偽簡考

——偽作大雅宛蕪村「書簡」四通——

玉城 司

はじめに

日本南画の大成者である大雅と蕪村が、明和八年成立「十便十宜図（画册）」を介して交渉があったことは、よく知られている。が、この両者が親しく風交を結んだかどうかは、現存する蕪村側の資料からは、明らかではない。しかし、安永五年四月十五日付霞夫宛書簡の尚々書で、

大雅堂も一昨十三日古人と相成候。平安之一奇物、をしき事二候。

と大雅の死を追悼していることからみて、蕪村が大雅の動向に関心を寄せていたことも、また疑いない。

大雅を「平安の一奇物」というのは、蕪村の褒辞である。「奇」は、「畸」に通じる。大雅を「畸人」として、遇するのは蕪村一人ではない。例えば『近世畸人伝』は、奇人大雅の面目をよく伝えている。

大雅池氏、諱無名阿利奈、字貸成、通名秋平、書画には或は九霞山樵と書す。京師の人。為人肅敬、寵辱をもて心をおどろか

さず。善物と化して、苟も合し志を紆さず。外、疎放にして、内、実修、人と交て謙損し、しかもおもねらず。礼法に簡にして、往べくして往ず、答べくして答へず、是を義にかへりみれば、いまだかつて失ところあらず、恵て弗望、簾にして弗劇、其取予得失において恬如たり。平生行事多人の不意に出づ。於是畸人の目あり。（中略）

墓誌ハ大典禪師著して石に刻む。此為人の全体は墓誌により、聞所の話を添て、其实を證す。

惠恩院六如大僧都図像贊、并小引、

丈人以二書画一著二名海内。余向以二室邇一屢相往来、略知其人。蓋葆真耦俗、隱于小伎者也。頃有レ人。齎其遺像。求題二一辞。余私欽二高風。不レ揣二無陋。輒為賦二長句。一字々実録、不レ敢文飾。丈人有レ知。応撫二掌於無何有之郷一矣。

鶉衣蓬髮意怡然。言語近禪形肖レ仙。避世仍懷濟世志。売山不蓄買山錢。機材滿レ屋纔容レ膝。川字成レ腔時弄レ絃。

至竟深心誰可^{カシ}レ^ス会。

空令^{クム}下^下姓^{ワシヲ}藝^ニ中^ニ伝^ヘ上。

(卷四 「池大雅」)

大雅「墓誌」に刻印された、「鶉衣蓬髮意怡然」または「避世仍懷濟世志」の詩句は、大雅が身なりに構わない隠士でありながら、世を憂うる救世の志を持つ人であったことを伝えている。『近世畸人伝』の作者は、この墓誌に依拠して大雅伝を執筆した由であるが「外、疎放にして、内、実修、人と交て謙損し、しかもおもねらず」と叙す。「畸人」とはこうした人となりを言うのである。『如水日記』に記された芭蕉の風貌「心底はかりがたけれども、浮世を安く見なし、諂はず奢らざる有様なり」を彷彿とさせる。こうした人柄を含めて、蕪村は大雅を「奇物」と捉えたのであり、詩人の鋭い感受性が大雅を理解し、その死を「をしき事」と哀悼したのである。

しかし、だからといって蕪村と大雅が直接親交を結んでいたとするのは、早計である。繰り返すが、現在紹介されている大雅生前の蕪村真蹟書簡では、大雅についてふれる記事は、死を報じた先引の書簡のほか見あたらない。また、大雅宛蕪村書簡も、現在もつとも信頼のおける古典俳文学体系『蕪村集』書簡編には、登載されていない(本稿で引用する蕪村真蹟書簡はすべて同書による)。

ところが、巷間には大雅宛蕪村書簡が伝存している。言うまでもなく、書簡は大雅と蕪村を結ぶ有力な証拠である。それゆえ、この両者の親密な交流を窺うことができる、と言いたいところだが、しかし、この「証拠」は後人の捏造らしい。つまり、偽作された書簡(以下「偽簡」と呼称)である。

偽簡を考察の対象とする必要はない、と考えるのは、研究者の正

道だろう。加えて、真贋の判断ができるほど、私が蕪村の筆蹟に明るいわけでもないことも承知している。

それにも関わらず、大雅宛蕪村書簡(偽簡)を取り上げるのは、大雅と蕪村を結ぶ「証拠」があっても不思議ではない、と考えるような私的な錯覚から自由になりたいためである。この両者の親交を確かめたいという欲求がある一方、同時代を同地に生き、同じく画によって身をたてていたとしても、この両者に親交がなくても不思議ではないと考えることができることも、実は大切なことではないか、と思われる。

とはいえ、紛れもなく巷間には大雅宛蕪村「書簡」が伝存している。この事実は、大雅と蕪村を直接的に結ぶ資料を求める欲求が、人々の間にもあつて、それゆえに偽簡が流布しえたのである、と考えるほかない。日本南画の双壁である大雅と蕪村に、親交があつて欲しいと願うのは、私ばかりではなく、その願望に私たちは、呪縛されているらしい。

悪く言えば、「偽作者」は、こうした人々の願望に「つけこんで」贋作したのである。好意的にみれば、人々の願望を叶えようと企図したのである。何れにせよ志は低い。が、制作された偽物は、「本物」をどのように理解し、受容したかを如実に物語る資料としての意味はある。正当な理解・受容によるばかりではなく、偽作のようなマインナスの受容を含めて、文化は継承され伝えられていく。偽作を検討することで、本物のもつ価値を逆から照射できれば幸いである。

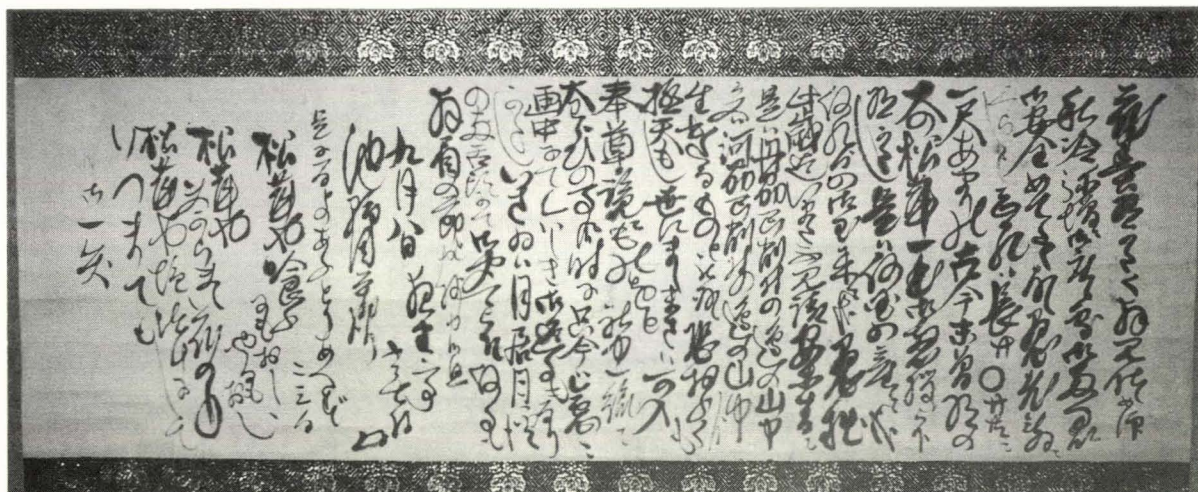
そこで、巷間に現存する大雅宛蕪村「書簡」に即いて、その意味と意義を考えたい。なお、こうした考証の性格上「書簡」の写真を

掲載させていたたくが、所藏者については、記さない。翻刻に際しては、句点のみ補い、漢字は概ね現行のものに改めたが、仮名遣いと改行は、原文のままである（句は一行にした）。

一

「書簡」(X)

花墨有かたく拝見仕候。如仰、
秋冷弥増ニ御座候処、御両君
御安全めてたく存候。愚老無為ニ
くらし申候。しかれハ、長サ〇サ共ニ
一尺あまりの古今未曾有の
大の松茸一本御恵投被下
有かたし。是ハ何国の産ニ候哉。
何れよりの御到来ニ候哉。愚拙、
此歳迄いまた不見請。案するニ
是ハ丹州弓削村の辺の山中
か又ハ、河州弓削村の辺の山中より
生出たるものと被存候。恐れおふくも、
極天もし世にましまさハ、可入
奉尊覧ニものと、杜中一統ニ
大わらひの事哉。時に只今ハ急々。
画中にてくハしき御返事もなり
かたし。いさゝハ、月居・月溪



の両舌頭にて、御聞可被下候。何事も
拝眉の節と申残申候。不宜(？)

九月八日

夜半亭蕪村(花押)

池野周平様

是に百とのあふ(不明)、とりあへず二三句

松茸や食ふにもおし、やるもおし

松茸や夫から夫へ花の内

松茸や塩つけにしていつまでも

御一笑

二

一見して気付かれるように、この「書簡」とほぼ同じ内容の大雅宛蕪村「書簡」が、既に山添三樹氏「松茸をめぐる蕪村」二通の手紙(『芸術新潮』一九八四年十一月号)に紹介されている。比較の便をはかるために、同誌掲載写真を、再掲させて頂く。同誌に山添氏の翻刻があるが、若干私意によって変更した箇所がある。翻刻要領は、先的要領と同じである。なお、便宜上二通の書簡をそれぞれ(A)・(B)と呼び、本稿で紹介した「書簡」を(X)とする。

「書簡」(A)

妙墨有かたく拝誦仕候。

しかれハ、長サ〇サ共に

一尺五寸あまりの古今

珍らしき大の松茸一本

御恵投被下、有かたし。是ハ

何れよりの御到来ニ候や。何国

の産物ニ候や。未曾有之

物ニ候。懸念するに、

是ハ丹陽弓削村之辺なる

山より生出たるものと存候。

恐多ふくも、極天もし世に

在しまさハ、可奉入御尊覧

ものと、社中一統大笑。

時に唯今ハ不叶、急画中

故ニくハしき御返事もなり

かたし。何れ明日ハ月溪・

月居の両舌頭にて、万々

可申上候間、左様ニおほしめし

可被下候。有合せの鹿紙

大乱筆御高免可被下候。

さしいそぎ早々如此候。不宜(？)

中秋廿日

蕪村

大雅堂主人

大雅堂主人
松茸や食ふにもおし、やるもおし
松茸や夫から夫へ花の内
松茸や塩つけにしていつまでも
御一笑
是に百とのあふ(不明)、とりあへず二三句
池野周平様
夜半亭蕪村(花押)
九月八日
の両舌頭にて、御聞可被下候。何事も
拝眉の節と申残申候。不宜(？)

松茸や食ふにも

おし、遣るもおし

なと心にうかみしまゝの

即吟、御一笑。

「書簡」(B)

尊翰難有拝誦仕候。

しかれハ、長サまるサ

一尺五寸計りの古今

めつらしき松茸一本

御めくみにあつかりありかたし。

極天世にましまさハ

奉入上覧ものをとおかし。

時に昨今ハ急画中

故にくはしき御返事も

なりかたし。何れ明日ハ

月溪をもつて万事申上候。

先ハ御請答までに

早々不宜。

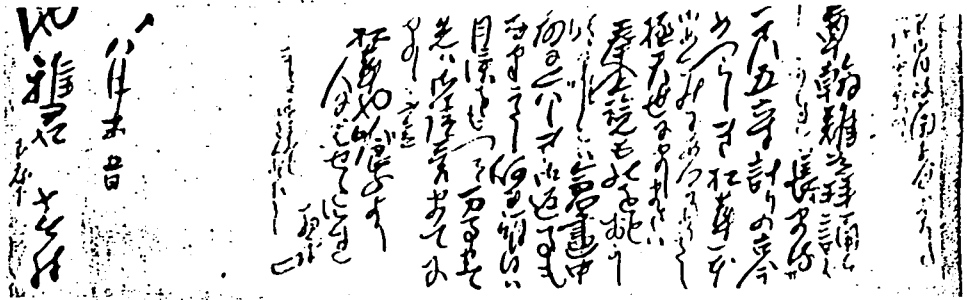
松茸や食ふより

人に見せたけれ

夜半

(花押)

なと口すさみ候。



御わらひ可被下候

(封印)

八月末五日

池雅君

蕪村

玉床下

写真で通した通り「書簡」(A)・(B)ともに、尚々書があるが、写真が不鮮明で判読できない。山添氏によれば、大雅の妻玉瀾への伝言である。⁶⁴⁾

以上三通の「書簡」を様々な角度から検討してみよう。

三

I 伝来・書風

(A)は、京都市美術館で開催された「大雅と蕪村展」(昭和五一年)に出品されたことがあった。この時期において、一応真蹟と考えられたとみていいだろう。(B)・(X)は、そうした事はなく、伝来も不明である。書体は(A)が、(B)の筆跡に比べて、蕪村晩年の活達自在な書風をとらえているように感じられる。(B)は蕪村中期頃の書風に類似する様に思われる。(X)は、晩年の書風と言えうが、厚ぼつたりとしすぎていて、上品さに欠けるように思われる。活達と言えはそうも言えるが、乱暴にすぎようか。また、(A)に書風が類似するが、これと別筆のようである。蕪村中期の書風である(B)もおそらく(A)や(X)と別筆だろう。大雅は安永五年に

没しており、蕪村との「親交」を、これ以前に設定する必要があることを勘案すれば、(A)や(X)の蕪村晩年の書風は好ましくなく、むしろ(B)の制作者に軍配をあげるべきであろう。蕪村の筆跡として、一般的に親しまれているのは、(A)や(X)である事は言うまでもない。

書風からみた印象では、これらは、同一人物によって三通りに書かれたものではなく、別人により制作されたものであろう、と考えるのが妥当である。とすれば、内容に関連があることは一目瞭然であるので、これらの「書簡」執筆者は、三者の内のいずれかをモデルにしていた可能性がある。が、そのモデルは別に求められるかもしれないし、また、蕪村真蹟書簡が実在していて、その模写の可能性も考えられようから、慎重に検討する必要がある。

II 形式・行数

(A)は、尚々書四行、本文二十一行。日付・署名・宛名二行。発句二行、発句評の依頼二行。

(B)は、尚々書二行、本文十三行。発句二行。署名一行。発句評の依頼二行。日付・宛名・署名等二行は、この前に封印の「シメ」があること、日付・宛名と本文との間隔が他に比べてかなりあることから推して、書簡の包み紙を裁断して、表装したということだろう。他の二通にはない特色である。書風と合わせ、(A)・(X)とは趣を異にする。

(X)は、尚々書がない。本文十九行。日付・署名・宛名二行。署名の下に花押があるのが、(A)と異なる。発句前書一行。発句六

行、発句後書一行。他の書簡にある尚々書がなく、また発句がそれぞれ一句であるのに対し、(X)に三句あるのは、この「書簡」の特色である。

形式・行数だけから見ると、(A) (B) (X)の蕪村「書簡」は、相互に関連がないと言える。内容に立ち入らなければ、まったく別の書簡の趣をもつのである。ちなみに本文の書きだしも(A)「妙墨」、(B)「尊翰」、(X)「花墨」と異にする。しかし、これに続く「難有拝誦(見)仕候」の文言がほぼ同じことからみて、書き出しを改変する必然性がない。

内容がほぼ同じであるのに、形式・行数や書き出しに異同があるのは、意図的にこれらを、改変したと考えるべきであろう。三通の「書簡」の成立時期は不明だが、これらの内のいずれかをモデルにして、他の「書簡」が成立したとすれば、考えられる利益は、かりに真蹟として一同にこれらが会した場合に、推敲された結果、形式や行数が改変されたと申し訳がたつことである。しかし、偽作者は、そんな場面が起こりうることを想定して「書簡」を制作するものだろうか。

III 宛名・日付

宛名も(A)「大雅堂主人」、(B)「池雅君」、(X)「池野周平様」と異なっている。

(A)は雅号でもっともオーソドックスな呼称であり、先述の大雅の死を報じた安永五年四月十五日付霞夫宛蕪村真蹟書簡に、「大雅堂」の用例がある。

(B)は「池大雅」の姓のみ記して、雅君は軽い敬称であろう。

本文が三通のなかで、もつとも簡略なことに相まって、大雅と距離をおく姿勢が看取される。蕪村と大雅の関係をこうした距離感覚で「書簡」制作者が、理解していたと思われる。

蕪村は、享保元年(一七二六)生、天明三年(一七八三)没。大雅は享保八年(一七二三)生、安永五年(一七五六)年没。若干蕪村の方が年長である。蕪村が大雅を「雅君」と呼ぶにふさわしい。

(X)は、これらとまた趣を異にする。大雅は、池野嘉左衛門の息、通称菱屋嘉左衛門秋平。宛名「池野周平」は、大雅の通称「秋平」に「周平」を当てたものであろう。雅号ではなく、あえて通称を記したところに、制作者の得意が感じられよう。(X)の制作者は、(A)や(B)の制作者に比べ、大雅と蕪村の交渉を俗事にも及ぶものと設定したと言えよう。

宛名から推して、蕪村への距離感を親疎の感覚で測定すれば、(B)はもつとも疎く、(X)はもつとも親しく、(A)はちょうどこの中間である。もちろんこれは、偽作者の大雅と蕪村の親疎関係の度合いに対する願望または推測に基づき設定されたものである。(A)書簡が、ある時点において、一部から真蹟と見なされたのは、書体もさることながら、こうした二人の距離の測定感覚に共感し、適切であると考えられたものか。

日付は三者とも相違する。すなわち、(A)は中秋(八月)二十日、(B)は八月二十五日、(X)は、九月八日。(A)と(B)には五日間、(B)と(X)には約十日間の開きがある。「長さ、まるさ(太さ)」ともに「一尺五寸」のまったく同じ「立派」な松茸を、こ

れだけの間に三本得ることは、常識的に先ずありえない。大雅から松茸を贈られたという年代が異なつたと仮定しても、まったく同じ大きさのものはありえないはずであり、山添氏が指摘された通り、蕪村の札状も同じ調子で書かれるはずもない。

これによって、前記「Ⅱ形式と行数」で考えたような、これら三通が真蹟として一同に会した場合に、推敲によって形式・行数・書き出しが改変されたという口実を、自ら、与えないことになる。つまり、日付の異同は、形式・行数・書き出しの異同が、推敲を意識したものでなく、それぞれの制作者の恣意・私意に出たことを証明している。ただし、現存する三通の「書簡」はいずれも、各々が自らを真蹟と主張できることに変わりはない。偽作者は、それで十分であつたろう。

Ⅳ 内容・発句

内容は、挨拶の文言や語句の表記など細部の異同を看過すると、三通とも基本的に同じである。すなわち、

- ① 返書の挨拶
- ② 松茸の恵与に対する礼言
- ③ 極天(孝謙天皇)の尊覧を希望
- ④ 画業の多忙
- ⑤ 門人(月居・月溪)を御札に派遣
- ⑥ 挨拶・日付・署名・宛名
- ⑦ 「松茸」を詠んだ発句

の順で執筆されている。

小異を言えば (X) は①の後に時候の挨拶がある。また、先述したように (B) は、日付・宛名・署名が末尾にくる。が、挨拶を除く主文の内容は、簡略か詳細かの差異はあっても、「巨大な松茸を孝謙天皇(女帝)の尊覧に入りたい」と言う事につきる。(A) と (X) は、「弓削村」から弓削道鏡を連想するように読者に促しているが、そうするまでもなく、(B) も松茸を道鏡の巨根に擬えていることは明白である。「女帝が生きていらして、この松茸(巨根)を御覧になられたら、さぞやお喜びでしょう」といった、甚だ卑猥な想像が (B) の「おかし」であり、(A)・(X) の「社中一統大笑」となる。

孝謙天皇と道鏡をめぐる隠微な説話が巷間に流布したのは、何時頃からか知らない。しかし、江戸期では正徳五年序の稗史『前々太平記』巻之三に、「丹波国弓削氏道鏡を」濟世の法徳もなく、只奸弁俊才あつて大陰の男なり」とし、高野天皇(孝謙天皇)から「朝夕御側を離ず御寵愛を受ける事限なく」「奸淫の沙汰止ず」という状態であった、と叙している。女帝と道鏡をめぐる隠微な説話は、遅くとも江戸時代初期には流布していたものと見られる。恐らく蕪村「書簡」の偽作者は、この話題を提示することで蕪村の磊落な人柄をイメージさせようとしたのであろう。

ところで、画業に多忙な蕪村に代わって、(B) では門下月溪ひとりが、明日大雅を訪ね、(A)・(X) では、月居・月溪のふたりが訪ねるという。蕪村門下中で彼等が選ばれたのも、理由があるだろう。この二人が蕪村門のなかでとびぬけて著名であったことが、その最大の理由であろうが、やや立ち入ってこの二名について考えてみよう。

月溪は画家、画号は呉春。大雅と蕪村が画事を通じての風交を結び、同じく画をよくした月溪(呉春)が、その仲介者として存在していたという設定は不自然ではない。月溪の人柄は、天明三年九月十四日士川宛蕪村書簡では「篤実之君子」と叙されている。蕪村の信頼のほどが窺える。画事をよくしたことに加え、使者としてふさわしい。

ところが、同じ書簡中で蕪村は、篤実の月溪に対して月居を「大魯・月居がごときの無頼」と述べ、その人柄を危惧している。この月居が (A)・(X) で大雅への使者とされたのは、逆にその「無頼」ぶりが、卑猥な巨根話を伝えるのに適切な人柄と見込まれたゆえではなからうか。この二通が弓削村から道鏡を連想させることに多く筆を費やし、月溪と対照的な人柄の月居が使者に加えられるのは、制作者が隠微な説話に重点をおいていることと緊密に関連しているう。

ところで、今一通この月居と月溪の二人を加えた大雅宛蕪村「書簡」が実在していた。参考のためにその全文を引用しておく。

各々三々五々がす、めもだし難くて鳥渡拝顔、夕方すゞみ、今にわすれがたくておもしろく、又々今夜も、願はくは一方へ向御出かけ被下候はば珍重々々、月溪・月居の両子は粗肴の用意、御菜も大極上々飛切の米の油用意させるつもりに候、何卒御内政玉瀾の君も、ほむらなく御同道下され候様に祈るものならし。

葛水にうつらで嬉し老の顔
祇園会や木瓜花咲く処まで

酒百藥長

酒百惡長

酒はたゞのまねば須磨の浦さびし

すぐればあかし波風ぞ立

御一笑、御出門あるか、いやか、善惡

左右共に御返事奉願候。

月溪宅より

蕪村

東山

大雅堂主人

玉几下

『画断』第三十四号 大正三・八

この書簡も偽簡である。それは、発句「葛水に」の下五「老の顔」が蕪村没後の寛政十一年刊丈左編『俳諧発句題苑集』所載の句形を踏襲していること、発句「祇園会や」が超波の句であるのに蕪村句として、発句「祇園会や」が超波の句であることを蕪村句と示す資料・証拠として偽作されたことを窺わせている。

ともあれ、ここでも月溪・月居が介在しているのは興味深い。性癖が異なるこの二人が蕪村門の双壁と理解されていたためであろうか。月溪の「篤実」に対し、月居の「無頼」。蕪村はこの双方をとくに受け入れることができる懐の深い人物であると、偽作者や偽作の受容者は了解していたように思われる。

もちろん、これは蕪村の預かり知らぬ事である。偽作者が俗うけ

をねらって、真実らしくしたる為にした細工であった、と言えるだろうが、こうした蕪村像をわたしたちも、好ましく思い描いていることもまた疑いないだろう。蕪村一派から不興をかった大魯にたいする蕪村の温情が思い出される。こうした蕪村像を描いた点では、これら偽簡を好意的に受容することもできよう。

しかし、偽作者は芸術家としての蕪村については配慮が欠けていた。これら三通が、松茸を詠んだ発句を挙げているには、まったくの不用意であり、馬脚を現わす結果になったと言っている。もっとも好ましくからざる例は、(X)の三句である。

松茸や食ふにもおし、(い)やるもおし

松茸や夫(それ)から夫へ花の内

松茸や塩づけにしていづまでも

これらについて、いちいち論評するまでもない。蕪村がどう間違ってもこうした発句を作るはずがないからである。しかし、偽作者が蕪村俳諧をこの程度のもので理解していただろうと考えることは、可能である。

芭蕉没後門人たちが自己流の解釈を加えながらも、芭蕉風俳諧や芭蕉句を伝えたのに対し、蕪村はそうした意味でのひろがりはなく、ためにこうした発句でも蕪村句として通用したのではあるまいか。

『蕪村句集』は、蕪村没年の翌天明四年(一七八四)に刊行、発句八百六十六句を収録している。はじめての蕪村句の注釈書は、天保四年(一八三三)刊の乙二著『蕪村発句解』である。その意義は小さくないが、前記書中の七十二句が取り上げられているにすぎない。明治期の子規らが、写生句の理想として蕪村句を高く評価する

まで、蕪村俳諧は、芭蕉俳諧のような広範かつ深切な受容層をもたなかったと言える。

(X)の書風が、蕪村の風であることからみて、発句も当然にも蕪村風をねらったものと考えられる。とすれば、甚だしく曲解された「蕪村」句の例として記憶すべき発句であると言うほかない。これらの句を百歩譲って無理を承知で好意的にみれば、偽作者のイメージに明朗磊落な蕪村像があったと想像される。が、放縦に過ぎる。磊落というよりでたらめな発句である。蕪村受容の歴史の浅さを露呈した安易な「句作り」であったと言えよう。おそらく蕪村句受容は、安易な蕪村像と表裏一体の関係にあった。

偽作者は、「俳聖」芭蕉の謹厳なイメージを思い描く一方で、卑俗で親しみやすい私たちと等身大の蕪村像と蕪村句を創作してしまっただけではないだろうか。

なお、最初の発句は、(A)所載の発句と同じものであることから推察して、(A)を真蹟書簡とみなし、これをモデルにして(X)「書簡」が制作された可能性が考えられる。発句については、(A)の発句に興味を誘われて、悪戯心で二句加えたのであろう。言わんとするところは、「立派な松茸を独り占めして、いつまでも保存しておきたい」であり、そうした松茸を恵与してくれた大雅へ感謝の念であろう。

しかし、発句の感謝は、媚び追従の寓意にはかならない。大雅「十便図」に対し蕪村「十宜図」が、いささかも媚び諂わず、追従してないのは衆目の一致するところ。日常生活といえども、また謝礼を述べる書簡としても、これほどに媚び追従する必要はない。これら

の発句からは、大雅の封間としての蕪村像を作りあげてしまったと言えよう。蕪村にとっても「書簡」の受け取り手に擬せられた大雅にとってもマイナスイメージである。

こうした(X)や(A)の発句に比べて、(B)の発句、

松茸や食ふより人に見せたけれ

は、幾分穏当と言えまいか。(X)・(A)の発句が、主文と離れてひたすら松茸を頂戴したことを有難がり、送り主大雅に媚びているのに対し、(B)の発句は、松茸を「極天」にご覧いただきたいという主文と内容を一致させている。いわば、句はその要約にすぎないが、追従の気分は他の二通ほど露骨ではない。先述した「池雅君」という宛名が、大雅との適切な距離間を感じさせるように、この発句も挨拶句・謝礼句としてはばあ当な距離間を保つ感覚で作られている。かりにこの句がなかったとしたら、書風・形式・内容などからみて、(B)は蕪村真蹟からの写しである可能性も考えられ、検討すべき余地が残される。写しならば、蕪村と大雅の親交を証明する資料として価値があるのだから。しかし、不用意な発句があるために、その必要がないことを自ら証明することになったと考えられる。

V 三通の関連

以上I～IVでのべてきた三通ともに偽作と考えられる「書簡」相互の関係について、簡略にまとめておく。内容からこれらが不即不離の関係にある事は疑いない。

(A)と(X)は、次の三点で共通する。蕪村晩年の書風を模倣すること。弓削村を持ち出し道鏡を強く意識させること。「食ふにも

おしいやるもおし」の発句一句。また「未曾有」「尊覧」「社中一統」など(B)には見られない用語も共通して使用されている。この両者に密接な関連があること、疑いない。

両者の大きな異同は、(A)に尚々書があるのに(X)にはないこと、(A)に発句が一句であるのに(X)に三句あること、(A)には時候の挨拶がないが(X)にあることの三点である。かりに(X)に基づき(A)を作成するとすれば、尚々書を加え、発句二句と時候の挨拶を削除する必要がある。(A)に基づき(X)を作成するには、ちょうどこの逆の作業がなされればいい。(A)に依拠して(X)が偽作されたように思われるが、実証は困難であり、またその必要もない。いずれかが他方を真蹟書簡とみて贋作したのであろう。

(B)は、これまで考えてきたように、もともと真実味をもった書簡であり、あるいは真蹟の写しである可能性も考えられる。しかし、発句の格調が低い事は、他の二通と共通している。これは蕪村と大雅の親密な風交の証拠を求めたい願望から生れた偽作と考えるべき「書簡」であろう。

(B)と(A)・(X)との関連についても推測の域を出るものではないが、(B)が先ず成立していて、他の二通が制作されたのではあるまいか。道鏡についての(B)の簡略な記述よりも(A)・(X)の卑猥で入念な記述の方が俗受けし、流布しやすいからである。また、行数や句の多い(A)・(X)の方が一般的に「商品価値」が高いとみられ、贋作をなす動機となるからである。

とすれば、これらの「書簡」がいつ頃成立していたか気になる。私は(X)のみ原本を見る機会に恵まれたが、料紙等からみて近代

以降のものであるように思われた。蕪村が高く評価されたのは、周知の通り近代の正岡子規以降である。偽作は、本物の価値評価が高くなるに従って受容も高まる。いわば、本物と表裏一体の関係にある。これについては更に検討を要すが、子規一派の蕪村崇拜熱にうながされて、発句入り偽作がなされたと現時点では考えている。

先に引用した『画断』に紹介された偽作書簡は、寛政十一年刊丈左編『俳諧発句題苑集』所載の句形を踏襲していることから同年を遡ることはない。としても、これも明治以降の偽作ではあるまいか。これらの「書簡」は偽作が次々と「偽簡」を生んだ例であるように思われる。

おわりに

蕪村と親交を結び、蕪村俳諧のよき理解者のひとりであった上田秋成は、蕪村の死を「仮名書きの詩人西せり東風吹きて」の発句で哀悼している。その秋成は小説家としての出立に際し、「偽めきし真は語るとも、真くさき嘘言は吐かぬものとかや」(『諸道聴耳世間猿』序)と作家としての覚悟を記していた。

本稿で取り上げた蕪村「書簡」の偽作者は、蕪村の磊落なイメージや蕪村・大雅の競作が遺されている事から連想して「真くさき嘘言」を作り上げてしまった。

蕪村と大雅の競作、明和八年成立「十便十宜図(画冊)」は、隠逸・離俗の志向に基づく文人の遊びであった。早く田能村竹田に、「大雅逸筆、春星(蕪村)戦筆」云々(『山中人饒舌』)と評されたように

画人として深い関心が、蕪村にはよせられていた。

しかし、蕪村研究が絵画と俳諧の緊密な関連からなされるようになったのは、近年の清水孝之氏や尾形仂氏の研究以降であり、研究の歴史は、半世紀を経っていない。本稿で取り上げた四通の大雅宛蕪村「書簡」は、画人としての蕪村のイメージに依拠した空想の産物であり、画・俳諧双方の緊密な関連を考慮しなかった「真くさき嘘言」であった。俳諧と画の研究が別々になされてきた蕪村研究の片手落ちの状況を衝くものとして、こうした偽作が存在しているのであろう。

注 山添治樹氏から昭和五十一年「大雅と蕪村」展図録のコピー等を御恵与頂いた。

(A)の尚々書は、

□□御内政玉瀾女様よりたにさく御こしと候へ共、今日ハ右之仕合、御用捨可被下候。重而請上可申候ハ、よろしく御伝言奉願入候。さて

く御すきにも何分御来駕奉待候。
と判読される。山添氏に深謝申し上げます。